



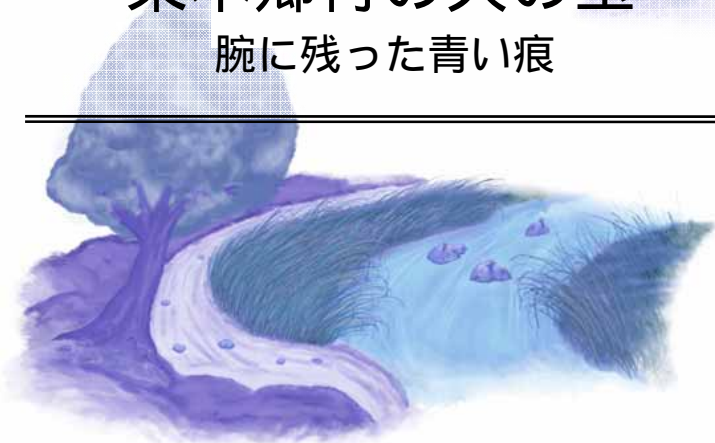
ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界



佐用安川の猫堂
魚を盗んだ猫のとむらい



東本郷村の火の玉
腕に残った青い痕



伝説

佐用安川の猫堂
魚を盗んだ猫のとむらい
東本郷村の火の玉
腕に残った青い痕

紀行

近世西播磨の怪談
・化け猫
・火の玉
・『西播怪談実記』

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

佐用安川の猫堂

魚を盗んだ猫のとむらい

江戸時代、元禄（げんろく）年間（1688～1704）のある夏の暑い日のことです。今の佐用町安川（さようちょうやすかわ）に住んでいた佐右衛門（さえもん）さんは、村の前の川でたくさんの魚を捕り、家に帰って竹ぐしにさして魚を焼いていました。

すると飼っていた猫（ねこ）がその魚をくわえて縁の下（えんのした）へ逃げこみ、食べてしまいました。

「こら！ 悪いことをするな！」

佐右衛門さんはしかりつけましたが、猫の方はそれを聞いた様子もなく、そのうちまた魚を持っていこうと手を出しはじめました。

佐右衛門さんはとても腹を立て、そばにおいてあった竹の棒で猫をたたきました。ところが、当たりどころが悪かったのでしょうか、そんなに強くたたいたつもりはなかったのに、猫はぱったりとたおれ、そのまま死んでしまいました。

「こりゃ、かわいそうなことをしてしまった。」

佐右衛門さんはくやみましたが、どうにもなりません。しかたがないので前の川原にうめてあげることにしました。

その翌年のことです、佐右衛門さんの奥さんが子供を産みました。生まれて七日目の晩のこと、赤ん坊を奥の部屋に寝かせて、家族がいろいろばたでそれぞれの仕事をしていると、赤ん坊の「きゃっ。」という声が聞こえました。佐右衛門さんがおどろいて奥の部屋へとんでいくと、一匹のやせた猫が赤ん坊をくわえてつれていこうとしています。

「なんてことをする！」

佐右衛門さんがどなりつけると、猫は赤ん坊をはなしてどこかへ逃げてしまいました。しかし赤ん坊はすでに意識を失っていて、いろいろ手当をしましたが、そのかいなく、とうとう死んでしまいました。佐右衛門さんたちはなげき悲しみ、ねんごろにとむらってあげました。

伝説

佐用安川の猫堂

魚を盗んだ猫のとむらい

それから一年がたち、また子供が生まれました。ところがその赤ん坊も、ある日の夜中に姿が見えなくなり、家族みんなで探したところ、裏の畑で食い殺されていました。世間では、これは猫のしわざだ、佐右衛門さんが殺してしまった猫がうらみを晴らしているのだ、とうわさし合いました。

それからまた一年、男の子が生まれました。今度こそは、と家中で用心して育てていましたが、ある夜、見はりの家族があまりの眠たさについとうとしてしまい、はっと眼をあげると、赤ん坊にかけていた着物がなくなっていました。急いで赤ん坊の様子を確かめると、かわいそうなことにもう息をしていませんでした。

佐右衛門さんはすぐに呼びおこされて話を聞きましたが、今度は驚きませんでした。

「実はいま、夢を見ていた。やせた猫がやってきて、『おれはおまえに殺された猫だ。うらみを晴らすためにおまえの子供を三人殺した。でもまだうらみは晴れない。これからもどんどん殺してやる。』と言っていた。やはり猫のしわざだったのや。」

佐右衛門さんは青ざめた顔でぼそぼそとそう話すと、頭をかかえてうずくまりました。家族たちもとてもこわくなり、こうなっては猫のとむらいをねんごろにしてあげるしかないかと相談し、小さなお堂を建て、お坊さん呼んで精いっぱい猫の供養(くよう)をしてあげました。

それで猫が許してくれたのでしょうか、それからは何事もおこらなくなりました。その後に生まれた佐右衛門さんの子供も、無事に大人になったということです。

(『西播怪談実記』をもとに作成)

伝説

東本郷村の火の玉 腕に残った青い痕

江戸時代の元禄（げんろく）年間（1688～1704）のことです。今の佐用町上本郷、下本郷（さようちょうかみほんごう、しもほんごう）のあたりに、太郎左衛門（たろうざえもん）さんという人が住んでいました。そのころ本郷は、東本郷村（ひがしほんごうむら）と呼ばれていました。

秋口のある日、太郎左衛門さんは、用事があって近くの村へ出かけ、帰りが夜おそくなってしまいました。雨がしとしとと降る暗い夜でしたが、よく通いなれた道なので、傘（かさ）をさしてゆっくりと歩いて帰ってきていました。

するとある藪（やぶ）のかげで、火が燃えているのが見えます。太郎左衛門さんは少しおどろきましたが、むしろ持ち前の負けん気が出てきました。

「これはうわさに聞く火の玉というやつやな。ちょうどいい。今夜ははっきり正体を見届けてやろう。」

太郎左衛門さんはこっそりとその火の玉の方へ近づいていきました。しかし、あともう少し、というところまで来たときに、火の玉はすっと消えてしまいました。また出てくるかとしばらく待ってみましたが、もう何事もおこりませんでした。この辺で燃えていたはず、という場所を探ってもみたのですが、やはり何も見つかりませんでした。

つぎの朝、太郎左衛門さんが顔を洗おうとして手を見ると、両腕（りょううで）のひじから先が真っ青になっていました。

「ははあ、これは火の玉の場所を探したせいやな。」

太郎左衛門さんは、何度も腕を洗いましたが、その色はまるで落ちませんでした。でも、二、三日たつと、次第にうすくなり消えていったということです。

（『西播怪談実記』をもとに作成）

紀行 近世西播磨の怪談

化け猫

猫が化けると恐ろしい。このサイトで紹介した猫の怨霊（おんりょう）は、殺されたうらみを子供殺して晴らす。紀行文「狸と狐」で紹介している狐や狸も人に害を及ぼすが、失敗して返り討ちにあうような間の抜けた話も多いし、場合によっては人間に恩返しをしてくれることもある。猫にもそうした話はあるが、やはり凶暴な話の方が目立つ。

よく知られているのは、吉田兼好（よしだけんこう）の『徒然草（つれづれぐさ）』89段に出てくる「猫また」であろうか。夜更けに家路を急ぐ僧侶の足もとに、何者かがやってきて首もとに飛びついた。僧侶は腰を抜かして道ばたの小川に転がり込み、「助けてくれ。猫まただ、猫まただ。」と叫んだ。近所から松明（たいまつ）を手に人々が駆けつけてみると、実は僧侶が飼っていた犬が主人に飛びついただけだった、という話である。

この話は笑い話になっているが、猫は年をとりすぎると「猫また」になって人を喰う、と考えられていた。「猫また」は尾の先が二股に分かれている、という。



猫
（『北斎漫画』）



猫また
（『怪物画本』、個人蔵）



佐用町安川



安川の薬師堂



たつの市新宮町香山の揖保川

このサイトの伝説の典拠とした、18世紀の怪談集『西播怪談実記（せいばんかいだんじっき）』には、ほかに3つの猫の伝説が載せられている。1つ目は、現在のたつの市新宮町香山（しんぐうちょうこうやま）の伝説である。久太夫（きゅうだゆう）という村人が、飼っている鶏が毎晩夜鳴きをするのでよくないきざしと考え、村の前を流れる揖保川（いぼがわ）に捨てた。するとその鶏が、たまたま香山に商売でやってきて川原で昼寝をしていた塩商人の夢枕に立ち、「どこかへ行ってしまっていた久太夫の飼い猫が戻ってきて、久太夫の命をねらっている。自分はそれに気づいたので毎晩早鳴きをして猫を追い払っているのだ。」と告げた。商人はびっくりして久太夫にこのことを告げ、久太夫は猫を見つけて殺した、とされている。

2つ目の話。現在の姫路市林田町六九谷（むくだに）では、村の庄屋の家に住んでいた尼僧に、長い間飼っていた年寄りの猫が言葉をかけた、という。尼僧は夫と相談して、「この猫はいずれ災厄をもたらすだろうから殺した方がいい。しかし、自分の手で殺すと死後の怨霊が恐ろしい。」と考え、ワナにかけてこの猫を殺したという。



姫路市林田町六九谷



六九谷の因幡街道

3つ目は、たつの市新宮町の城山城跡（きのやまじょうし）の話。龍野（たつの）で仕事をしている大工たちが、休日に近くの城山城跡の見物に出かけた。すると、唐猫谷（からねこだに）というところで岩の上に一匹の大きな猫を目撃した。仲間たちと、「人里離れたところに猫がいるのはおかしい、山猫ではないか」と恐ろしがった。龍野に帰ってから仕事場にしていた寺の住職に話をしたところ、「むかしから猫がいるという話は聞いていた。やはり、猫がいるので唐猫谷と言うのだろうか。」と語ったという。



城山城跡



城山城跡搦手への登山口
(唐猫谷)

この3つの話では、猫は何もしない。しかし、人語を語るという異常なきざしに、人々は敏感に反応している。さらには姿を目撃したりしただけで恐れおののいてもいる。妖怪化した猫は恐ろしいという共通認識があったためである。香山の猫の場合は、鶏が告げただけで、猫自身が異常な行動を見せたわけでもないのに殺されてしまった。少し猫に同情したくなるくらい恐れられている。

火の玉



宗玄火
(『怪物画本』、個人蔵)



姥ヶ火
(『怪物画本』、個人蔵)

火の玉の類をひっくるめて「光りもの」というが、これにはいくつか種類がある。最も有名なのは、靈魂を象徴するヒトダマ（人魂）であろう。そのほかに、狐や狸がおこす狐火、狸火、怪鳥や鬼神などのさまざまな怪物がおこす火や吐く火もある。そして、なんだか正体のわからない火の玉もある。

このサイトで紹介した火の玉も、正体は明示されていない。秋口の雨の降る闇夜、道ばたの藪の中で燃えていた火とされている。これも『西播怪談実記』から採った話である。この書物にはあと6つ火の玉の話がある。



佐用町上本郷、下本郷（江戸時代の東本郷村）



佐用川と佐用の町

紹介した話とよく似ているのが、佐用村（さようむら = 現在の佐用町佐用）の町はずれの藪に出た火の玉の話。ここではよく火の玉が出ると伝えられていて、著者の春名忠成（はるなただなり）が夜更けまで囲碁遊びをしておいた帰り道、雨が降っていたのできっと火の玉が出るだろうと藪を見ていると、はたして火の玉が燃え上がりぱっと消えた。翌日その話を若い者にしたところ、また雨の夜に2、3人が見に行き、やはり火の玉を見たという。火の玉は間近で見ると青く、離れて見ると赤く見えた。火焰が出る場所には古い塚があるとされるが確認できていない、という。塚と結びつけられているところからみると、人魂と考えられているようだ。

佐用村の住人の墓所にあった春草庵（しゅんそうあん）という寺院で目撃された火の玉も、場所柄から見て人魂と見てよいだろう。ある夏の夜のこと、この寺の僧侶が窓から外をながめると少し離れたところに火の玉が見え、まっすぐ庵の方へやってくる。僧侶がさわがず経をと念っていると、火は庭先を少しさまよった後に消えた、という。

人魂の話としてはつぎの話もある。梅雨のころで雨が降りそうなどんよりした日暮れ時、蒲田村（かまたむら = 現在の姫路市広畑区蒲田、西蒲田付近）へ友人を訪ねて出かけた人が野道を歩いていると、道の真ん中に2つの火が現れ、よじれたりもつれたりしてからまたぱっと消えた。友人宅に着いてその話をすると、それは「草刈火」と呼ぶ火で、むかし草刈りをしている時に喧嘩した子供たちが鎌で切りあって、2人とも死んでしまったことがあり、その亡霊が今でもその場所で喧嘩を続けているのだ、と教えてくれたという。



蒲田付近の夢前川



龍野城下町の町並み

龍野城下町の商家では、臨終間ぎわの母親を看病していた娘が、とつぜん何かを止める様子で外へ走り出した。と同時に母は死んでしまい、帰ってきた娘はすぐに気絶してしまった。やがて意識を取り戻すと「熱い、熱い。」と言うので、周りのものが様子を見たところ、着物の袖の下に火がついてくすぶっていた。落ち着いてから語った娘の話では「鬼が火の燃えさがる車を引いてきて、母を放り込んで引いていった。母を取り返したい一心で車をつかんで止めようとしたが引き離されてしまった、車はそのまま空へ昇っていき、あとは覚えていない。」ということである。これは死者を運ぶ鬼の火の話である。



挑灯火(『怪物画本』、個人蔵)

このほか、現在の宍粟市山崎町上牧谷、下牧谷（しろうしやまさきちょうかみまきだに、しもまきだに）では狐火（きつねび）が目撃されている。狐が口に三味線（しゃみせん）のばちに似た牛の骨のようなものをくわえていて、それを振ると火がつくというものだ。目撃した村人は、近寄ってきた狐をおどかして狐火を手に入れた。しかしつぎの晩から、夜中に寝間の戸を叩いて「返せ、返せ。」という声が続いたので、やむをえず返したという。

佐用郡山田村（やまだむら = 現在の佐用町山田）では、ある夏の終わりの午後、手まりぐらいの大きさの火がものすごい音をたてて飛び去っていき、その通った筋にあたる木はすべて枝が折れていたという。話の内容から考えると、これは隕石（いんせき）だったと考えてよいだろう。ここには墓場の亡霊と見られる火、死んだ子供の亡霊の火、鬼の車の火、狐火、はては隕石など、さまざまな怪火があげられている。江戸時代の人々は、実にさまざまな火の玉を見ていたようだ。こうした火は、日常生活の中で本当の暗闇を失った現代の私たちに、もはや見ることはできないのだろうか。

『西播怪談実記』

ここで紹介してきた『西播怪談実記』は、佐用郡佐用村に住んでいた春名忠成が執筆し、宝暦4（1754）年に本編4冊が、同11（1761）年に続編にあたる『世説麒麟談（せせつきりんだん）』4冊が刊行された。ここでは両者をあわせて『西播怪談実記』と呼んでいる。

著者春名忠成は、佐用村で商業を営みながら、怪談・奇談集などを著した文化人であった。忠成の本家は佐用郡新宿村（しんじゅくむら＝現在の佐用町末広）の大庄屋で、この一族のものが大坂で吉文字屋（きちもんじや）という書店兼出版社を営んでおり、忠成の著書もこの吉文字屋から出版されていた。

また、佐用には忠成と同時期に岡田光かど（ ）（おかだみつかど）という歌人がおり、忠成も光かどを中心とする文化人サークルの中で活動していた。江戸時代には、江戸や大坂といった大都市だけではなく、各地の地域社会でも多数の文化人たちが活躍していたのである。

（ ）「岡田光かど」は、正しくは、「岡田光圃」と表記しますが、インターネット上では正しく表示されない可能性があるため、ひらがなで表記しています。

『西播怪談実記』は、著者が実際に見聞した話を実話として記録する、という姿勢で執筆された。その文章は大げさにならず淡々と記されている。しかし、その分だけリアリティーがある。

本書には、合計87編の怪談が収められている。話の舞台となった地域は、佐用郡を中心に近隣の赤穂（あこう）、宍粟、揖西（いっさい）、揖東（いっとう）各郡から姫路周辺までに広がっている。内容で分類すると、狐や蛇など動物の怪異が26話、河童や幽霊・大入道（おおにゅうどう）などの物の怪（もののけ）話が25話、神仏の靈験が9話、ここで紹介した怪火、怪風といった自然の怪現象が7話、そのほかの奇談が20話となっている。

忠成が収録した話は、現代に編纂された民話・伝説集には収録されていないものがほとんどである。伝説や昔話は、歴史の中ではつぎつぎと新しい話が生まれ出され続けていたはずだ。これは今日でも「都市伝説」などを考えれば同じことが言えるだろう。しかし、今日われわれが知りうるものは、そのごく一部分に過ぎない。今日ですでに伝承としては残されていない伝説を数多く知ることができるという点でも、本書は貴重な文献となっている。



佐用の町並み



忠成の本家 旧佐用郡新宿村
春名家（佐用町末広）

用語解説

【城山城跡】きのやまじょうし

播磨守護赤松氏の拠点城郭の跡。たつの市新宮町にある。赤松則祐（あかまつそくゆう）が、文和元（1352）年ごろから築城を初めたが、その後も長期間にわたって工事が進められていたことがわかっている。赤松氏の本拠地であった赤穂郡（あこうぐん）、佐用郡（さようぐん）は、播磨の西部に偏っていたため、より播磨の中心に近い位置に拠点を構える必要があったことと、このころ美作方面で山名氏と対峙していたため、美作への交通路上に拠点が必要であったことの二つが、城山に拠点が置かれた理由と考えられている。

参考書籍

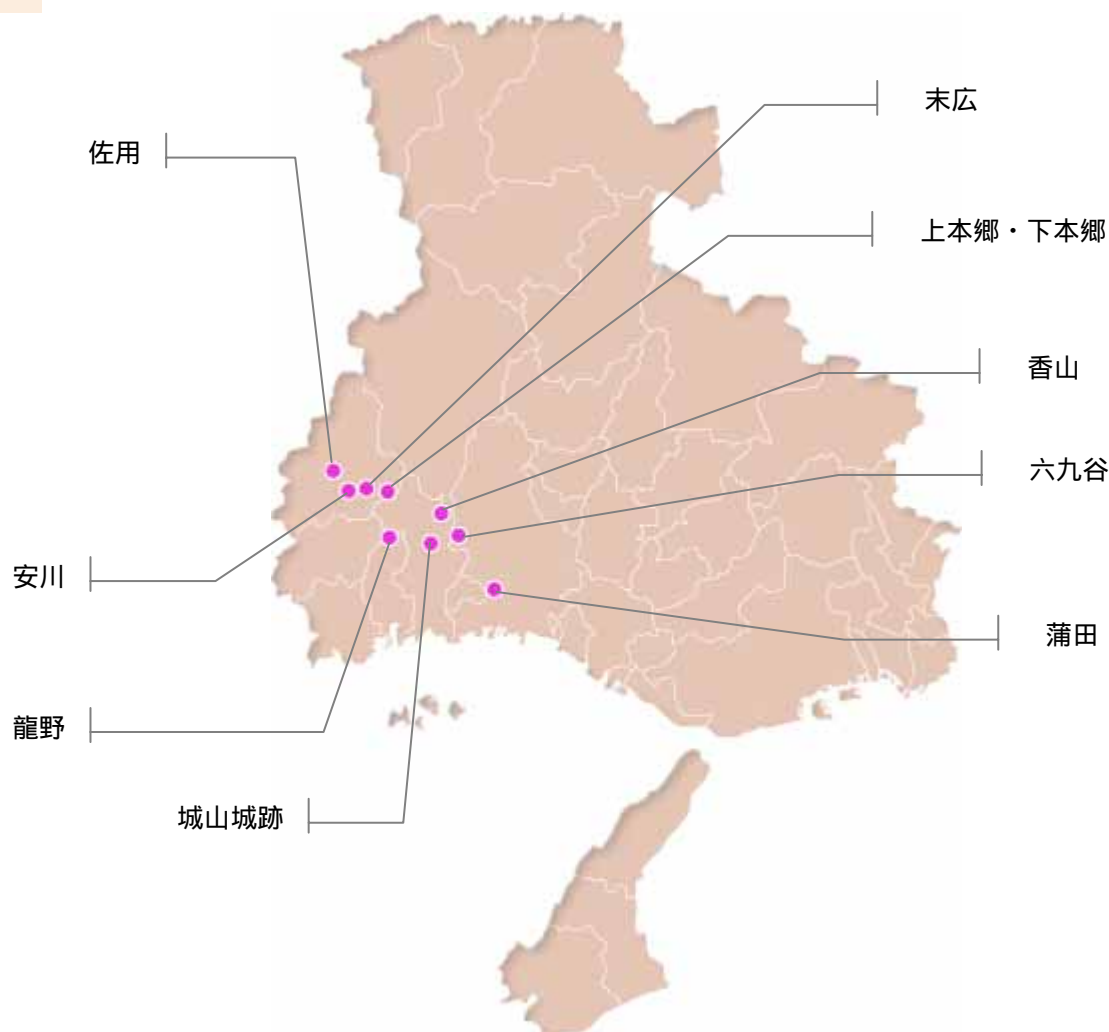
伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播磨の妖怪たち 「西播怪談実記」の世界	2001	編著：小栗栖健治・埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
徒然草 (収録：新日本古典文学大系39『方丈記 徒然草』)	1989	著者：吉田兼好、校注：久保田淳	岩波書店
播磨の妖怪たち 怪猫譚を中心に (収録：播磨学研究所編『播磨の民俗探訪』)	2005	埴岡真弓	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



香山	たつの市新宮町香山
上本郷・下本郷	佐用町上本郷、下本郷
未広	佐用町未広
佐用	佐用町佐用
安川	佐用町安川
龍野	たつの市龍野町龍野
城山城跡	たつの市新宮町馬立、市野保、ほか
六九谷	姫路市林田町六九谷
蒲田	姫路市広畑区西蒲田、ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日